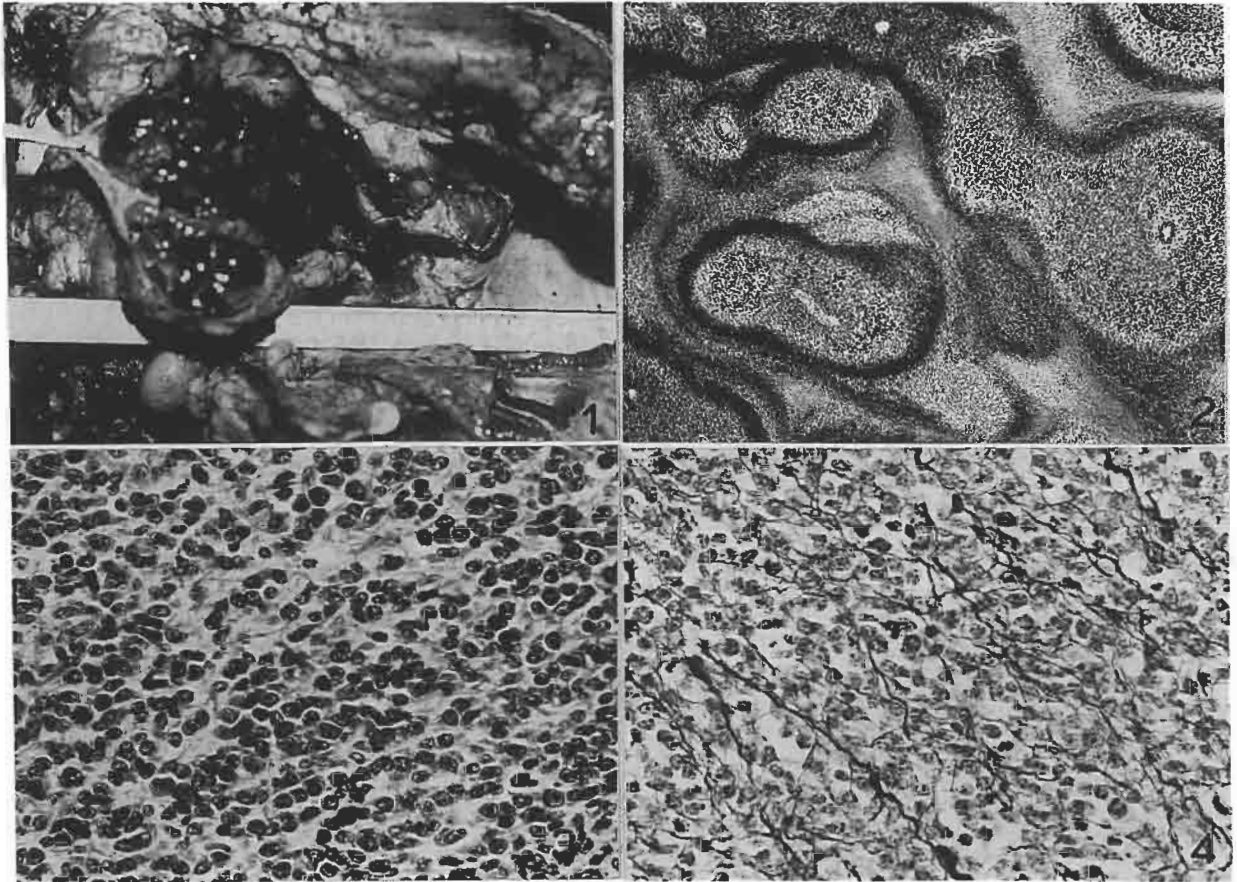


ウシの頭蓋腔内腫瘍

宮崎大学農学部家畜病理学教室出題 第36回獣医病理学研修会標本No.680



症例：ウシ，黒毛和種，1歳，雄。

臨床事項：1995年1月より右眼球の異常等を含む神経症状がみられ，抗生物質により治療。同年4月には起立不能となり，予後不良と判断され安楽殺し剖検。

剖検所見：外見上，右側眼球の突出，右側眼球後方頭部の膨隆，右側前頭骨角突起の骨折をみとめた。剖検にて右側頭蓋腔を置換する軟腫瘍がみられ，剖面は灰白色で出血を伴う広範な壊死巣が多発していた。その他，右側咽頭～下顎部に頭蓋から連続した ϕ 約20cm大の腫瘍形成がみられた(写真1)。また腫瘍は脳硬膜にまで浸潤・増殖し，脳底部では右側顔面神経と三叉神経から脳軟膜に達し，各々1cm大の腫瘍を形成していた。尚，肺と心に転移病巣がみられた。

病理組織所見：腫瘍は小型腫瘍細胞の著明な増殖部と広範な壊死巣から成り，壊死巣に対して腫瘍細胞や細胞破砕物が配列する偽柵状配列pseudopalisadeが特徴的に認められた(写真2)。腫瘍細胞の多くは，小型類円形で，好酸性細胞質とクロマチンに富む円形核を有しており(写真3)，稀に細長い細胞突起を

有していた。腫瘍細胞は発達した細網線維により小胞巣状，一部で柵状に配列する傾向がみられた(写真4)。免疫組織化学的に，腫瘍細胞はヒトneurofilament(NF)160kd，ウシNF200kd，S-100，vimentinに対する抗体に各々強陽性を示した。

考察及び診断：上述の検索結果より，本症例は，神経細胞への分化能を有する悪性腫瘍と考えられた。よって本症例の診断は末梢神経芽腫peripheral neuroblastomaとした。しかしながら，本症例は定型的神経芽腫の特徴的所見であるHomer & Wright型ロゼット形成を欠く一方で，偽柵状配列形成やvimentinとS-100の明瞭な発現など，通常は膠芽腫等の膠細胞系腫瘍でみられる所見を有していた。このことから，本症例は神経芽腫よりも，さらに未分化な腫瘍であろうと予想される。従って本腫瘍の診断については，ヒトの神経系腫瘍WHO分類で用いられている未分化神経外胚葉腫瘍primitive neuroectodermal tumor(PNET)という表現を用いた方が，むしろ適切ではないかと考えられた。